

麦 作

平成26年産小麦の総括

北海道農政部生産振興局技術普及課 北見農業試験場駐在

上席普及指導員（農業革新支援専門員）菅原敏治

昨年春の融雪期は、積雪の多かった北空知で7日、オホーツクで11日の遅れとなったが、4月中旬から気温が平年を上回り、平年より2日早い春耕期を迎えた。北海道の平成26年産小麦の収量（農林水産省大臣官房統計部発表）は、秋まき小麦463kg/10a（平年対比104%）、春まき小麦327kg/10a（平年対比113%）と前年並となった（表1）。品質では、ホクレン扱い分による秋まき小麦の1等麦比率は、過去5年間で最も高かったが、春まき小麦は、収穫時期の降雨により品質が低下した（表2）。「きたほなみ」の収量は、穂数が少なかったものの穂長が平年並となり、千粒重が大きく製品歩留まりも高かったことから平年並となった。地域によっては、ここ数年で最も多収となった。

また、品質ランク区分では、一部の地域でタンパク含有率が高かったことから基準値を超えたが、全般に基準値内であった（表3）。

以下、生育経過を振り返りながら今後の栽培の資に供したい。

表1 平成26年産小麦の作付面積と収穫量（北海道）

区 分	作付面積 (ha)	10a 収量 (kg/10a)	平年収量 (kg/10a)	平年対比 (%)	前年対比 (%)
秋まき小麦	107,500	463	445	104	103
春まき小麦	15,900	327	289	113	103

注1) 農林水産省大臣官房統計部発表（26年11月18日）

2) 平年収量は過去7年の豊凶年を除く5年平均

表2 麦類検査実績の推移

品 種 名	1 等 麦 比 率 (%)				
	H22年産	H23年産	H24年産	H25年産	H26年産
ホクシン	49.3	69.8	77.3	—	—
きたほなみ	53.3	79.2	89.2	81.9	99.5
ホロシリコムギ	0.0	78.5	86.9	—	—
タクネコムギ	62.3	79.0	86.8	—	—
きたもえ	20.6	9.7	61.9	84.4	79.4
キタノカオリ	63.9	81.3	73.2	96.6	97
ゆめちから	—	—	72.8	68.1	80
秋まき小麦計	50.2	78.7	88.7	81.4	98
春よ恋	35.2	76.1	83.5	93.7	51.8
ハルユタカ	0.0	79.8	72.1	91.4	89.3
はるきらり	63.9	85.4	88.8	91.1	89.4
春まき小麦計	33.7	77.4	83.7	93.1	59
普通小麦計	49.4	78.7	88.4	82.3	94.1

注) ホクレン扱い分

表3 「きたほなみ」の品質（平成23～26年産）

分析項目	H23年産	H24年産	H25年産	H26年産	基準値	許容値
容積重(g/ℓ)	851	858	856	863	840以上	—
F.N. (sec)	409	398	376	425	300以上	200以上
タンパク(%)	10.7	10.8	11.1	12.0	9.7～11.3	8.0～13.0
灰分(%)	1.49	1.41	1.39	1.41	1.60以下	1.65以下

注1) ホクレン扱い分

注2) 項目別加重平均値

1 小麦作柄の経過

(1) 秋まき小麦

は種作業は、平年並（遅1日）に行われ、越冬前の生育も平年並となった。ただし、は種が遅れた地域・ほ場で生育はやや劣った（表4）。また、は種後の気温が高温傾向で経過したことから、越冬前の生育は、平年並となった。

起生期は、融雪が遅れた上川で6日、オホーツクで12日遅れとなったが、積雪の少なかった十勝では2日早くなった。全道的には平年より3日遅れとなった。4月中旬から気温が平年より高く経過したことから、幼穂形成期は平年より1日早くなった。5月から6月にかけて高温、少雨で推移したため止葉期で4日、出穂期は5日平年より3日早くなり、穂数はやや少なく、稈長はやや短くなった。また、7月上旬から中旬も高温・少雨に経過し、成熟期が平年より4日早まったが登熟期間は44日間（平年43日間）と平年並となった（表4）。

このことから、全般に穂数はやや少なく、

1穂粒数も昨年よりやや少なくなった。このため、粗原収量は平年を下回ったが、1粒当たりの充実が良く、千粒重も昨年より重く製品率が高まったことから、製品収量はおおむね平年並となった。全道22ヵ所の現地委託試験（道総研農業研究本部）における「きたほなみ」の収量・穂数・千粒重から算出すると、1穂粒数の比較では、千粒重は平成25年産に比べ重かったが、1穂粒数は地域間で差が見られた（図1）。また、昨年は、4月中旬から5月の降水量が少なかった地域では、起生期及び幼穂形成期の分肥効果の発現が著しく遅れ、穂数不足とタンパク含有率が上昇したと考えられる。収穫作業はおおむね順調で、収穫期は7月中旬の降雨が少なかったことから平年より5日早くなった（図2）。

病害虫の発生について、雪腐病は積雪期間の長かったオホーツクや、越冬前に生育不良となったり、地域や気象条件で防除ができなかった地域での発生は多かったが、全道的には平年並であった。また、昨年発生の目立つ

表4 平成26年秋まき小麦の生育状況

振興局	は種期 (月日)	起生期 (月日)	幼穂形成期 (月日)	止葉期 (月日)	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	茎数(本/m ²)			穂数 (本/m ²)
							(10.15)	(5.15)	(6.15)	
空知	9.19(遅1)	4.13(遅2)	5.6(早1)	5.27(早3)	6.4(早5)	7.5(早5)	336(109)	1,225(88)	679(87)	626(90)
石狩	9.22(早1)	4.18(遅2)	5.9(早2)	5.28(早4)	6.6(早6)	7.20(早2)	234(98)	1,096(80)	648(90)	607(96)
上川	9.22(遅6)	4.22(遅6)	5.10(遅1)	5.30(早2)	6.6(早3)	7.16(早4)	328(63)	1,055(95)	653(96)	552(89)
オホーツク	9.26(遅1)	4.21(遅12)	5.10(遅3)	6.3(0)	6.10(早3)	7.24(早4)	198(89)	1,442(89)	793(92)	691(90)
十勝	9.26(遅1)	4.05(早2)	5.4(早2)	5.27(早6)	6.5(早6)	7.21(早5)	221(104)	1,510(90)	701(83)	630(86)
全道	9.24(遅1)	4.12(遅3)	5.6(早1)	5.29(早4)	6.06(早5)	7.24(早4)	248(94)	1,371(89)	711(87)	635(86)

注1) 各生育期節の()内数値は平年対比の日数

注2) 茎数・穂数の()内数値は平年対比の百分率(%)を示す

注3) 各農業改良普及センター調べ

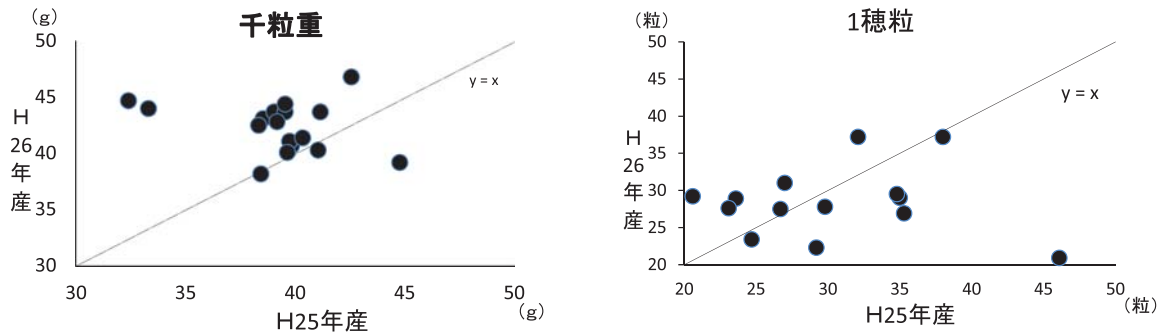


図1 平成26年産と平成25年産の千粒重・1穂粒数の比較

(現地委託試験成績より 品種「きたほなみ」)

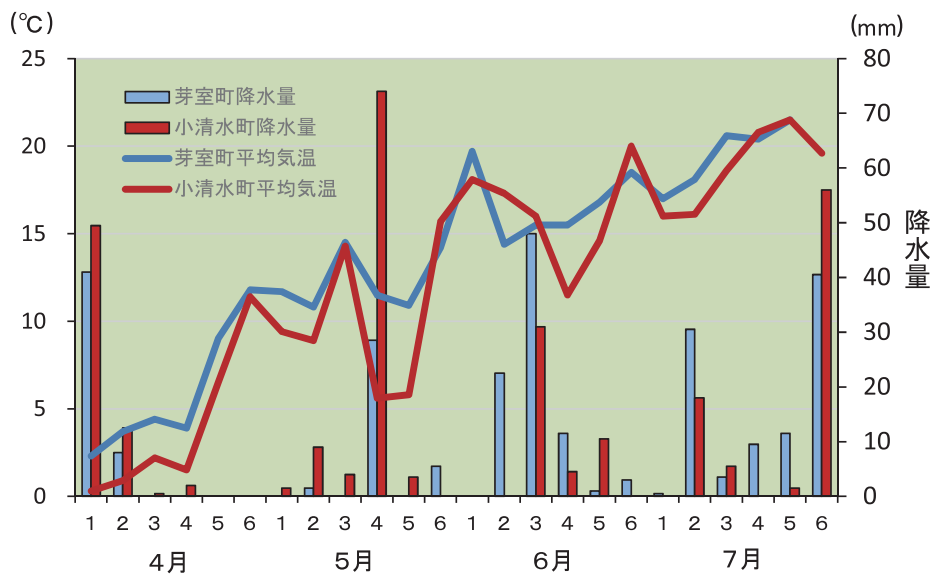


図2 平成26年4～7月の芽室町と小清水町の平均気温と降水量 (アメダスデータ)

た赤さび病は、平年並、赤かび病は、開花期以降、降雨が比較的少なく防除が適切に行われたことから発生はやや少なかったが、開花期に降雨があった一部の地域で被害が大きくなったは場がみられた。

(2) 春まき小麦

春まき小麦のは種期は、融雪の遅れにより

上川、オホーツクで遅く、特に4月4日に大雪のあったオホーツクでは、平年より11日遅くなった。その後、気温が高く推移したことから生育は回復し、出芽期は2～5日遅れ、幼穂形成期で0～2日遅れであったが、成熟期は4～5日早くなった(表5)。石狩・空知地域の初冬まき栽培では、空知のは種期が

表5 平成26年春まき小麦の生育状況

栽培様式	振興局	播種期 (月日)	出芽期 (月日)	幼穂形成期 (月日)	止葉期 (月日)	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)
春まき小麦	上川	4.26(遅5)	5.6(遅2)	5.14(0)	6.18(早4)	6.18(早4)	7.30(早5)
小麦	オホーツク	4.29(遅11)	5.7(遅5)	6.3(遅2)	6.23(早3)	6.23(早3)	8.6(早4)
初冬まき小麦	空知	11.1(早13)	—	5.14(0)	5.30(早2)	6.8(早2)	7.23(早4)
小麦	石狩	11.9(早2)	—	5.14(早1)	6.11(早2)	6.11(早2)	7.24(早4)

注1) 各生育期節の()内数値は平年対比の日数

2) 各農業改良普及センター調べ

平年より13日早かった。幼穂形成期は、4月下旬から気温が高く推移したため1日程度早くなり、出穂期は平年より2日早く、成熟期は4日早くなった。

収穫作業は好天に恵まれおおむね順調に行われ、収穫は4日早く終了した。しかし、一部の地域では降雨による品質低下が見られた(表2)。収量は、登熟期間が平年並の44日間で千粒重も平年並となり、歩留まりも良好であったことから多くなった(表1)。

また、平成25年に上川を中心にムギキモグリバエの被害が目立ったが、今年度の被害面積は、平年より少なかった。また、赤かび病の発生も少なかった。

2 次年度に向けて

「きたほなみ」は、収量構成要素である穂

数や1穂粒数などを確保しやすい品種である。しかし、茎数過多・倒伏・肥料不足・登熟期間の短縮等の影響で、同化産物の供給が不十分になると、細麦や製品率の低下を招くおそれがある。「きたほなみ」の栽培方法としては、ほ場条件に合った適切な目標収量を設定し、それに応じたは種期・は種量による茎数管理をしっかりと行う。加えて生育後半まで肥料不足とならないよう、根の活性を維持し施肥効率を高める栽培管理が重要となる。そのため、有機物の施用による地力の向上を積極的に行うとともに、土壌pHの適正化、保水性、透・排水性に優れた土づくりに努めるなど、基本技術の再確認が重要である。また、近年、病害虫の発生が目立つことから、ほ場観察に努め、病害虫発生予察と適期防除の励行と適正な輪作体系を図ることが重要である。



平成26年度作柄調査（清里町）



平成26年度作柄調査（富良野市）